

加藤卓男（1917-2005）

加藤卓男は、1804 年に創業した多治見の窯元「幸兵衛窯」の 6 代目当主である。三彩の技法を再発見し、1995 年に人間国宝に認定された。

加藤はペルシャ陶器に深い関心を持ち、ラスター彩などに使われる低温釉薬の研究に取り組んだ。古代ペルシャ陶磁の知識の多くは、時代の変遷や人の移動によって失われていたが、彼は徹底した研究と実験により、これらの釉薬を再現することに成功した。彼はペルシャと日本の美意識や技術を融合させた作品を数多く発表してきた。

加藤はこの歴史的な様式の再現の成功により、宮内庁から注目を受けることとなった。奈良の正倉院にある宝物館には、8 世紀の日本の三彩陶器が収蔵されているが、その制作の秘密は不明であった。この三彩の釉薬を再現するために、彼は同庁の依頼を受けて 9 年もの歳月をかけて研究を行った。

ここに展示されている花瓶は、日本古来の三彩の乳白色の上に、透明感のある鮮やかな緑やオレンジが描かれているが、スタツズが散りばめられたフォルムは、はるかに現代的である。古いものと新しいものの組み合わせは、加藤のユニークなスタイルを象徴するものである。